Title	次号目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.2 (1967. 2) ,p.234(106)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670201-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- 4) Greig-Smith P. Quantitative Plant Ecology, 1964, 2nd ed.
- 5) Hagget, Peter, Locational Analysis in Human Geography, 1965.
- 6) Hagood M.J., Statistical Method for Delineation of Regions, Applied to Data on Agriculture and Population, Social Forces, 21 (March 1943), pp. 288-297.
- 7) — and Price, Statistics for Sociologists, 1952.
- 8) Hadley G., Linear Algebra, 1961.
- 9) Harman H.H., Modern Factor Analysis, 1960.
- 10) 一松信 数値計算 昭和三八年
- 11) Lawley, Maxwell, Factor Analysis as a Statistical Method, 1963.
- 12) Miller, Kahn, Statistical Analysis in the Geological Sciences, 1962.

次号目次

論 説

「社会主義経済学」の対象と方法(一)……………平野 絢子
 ——「過渡期の理論」について——
 レオン・ワルラスの「資本形成および
 信用のモデル」について……………宮尾 尊弘
 ——定常均衡および成長均衡の存在証明——
 資料・研究ノート

書 評

大河内一男先生還暦記念論文集第2集
 『労働経済と労働運動』……………飯田 鼎
 P・A・サミュエルソン著
 『経済学』……………田中 宏

新刊紹介

書 評

大前朔郎・池田信共著

『日本労働運動史論——大正一〇年の
川崎・三菱神戸両造船所争議の研究』

飯 田 鼎

第一次的史料の充分な評価の上に立って、この時期の労働運動史の一断面を明らかにすることは容易な業ではない。ここにとりあげた大前・池田両氏の共同労作は、この意味でまことに意義深い研究成果であるといわなければならない。わたくしはいま、わが国の労働組合運動の研究をはじめたばかりであり、本書から実に多くのことを学ぶことができた。そこで本書について、その内容の紹介とともに、所見の一端を披瀝してみたいと考える。

二

わが国の労働運動史にかんする本格的な研究は、はじめられたばかりである。史料の蒐集および編纂とならんで、これらの上に立った科学的研究の成果が次第にあらわれつつあるとはいえ、それらは明治期の黎明期に属するものか、あるいは戦後の運動史が多く、大正期、まさしく、日本における独占資本主義の成熟とこれを背景としての労働組合運動の全国的な発展という時点での研究は、実に寥々たる有様であった。その大きな理由は、何と云っても、当時の労働者階級の運動の生々しい姿を正確に伝える史料が絶対的に不足していることがあげられなければならない。官憲の苛酷な弾圧による史料保存の困難と、これに加えて第二次世界大戦による焼失の被害が、研究者のこの時期の労働運動史への接近をいぢるしく制約していたことは疑いえない。このような悪条件のなかで、これらを克服し、

書 評